● 海老原 志穂 特定助教

Shiho EBIHARA (Assistant Professor)

研究課題： チベット・ヒマラヤ地域における牧畜文化の多層性に関する記述言語学的・地理言語学的研究
（A Descriptive and Geolinguistic Study on the Multi-layered Pastoral Culture in the Tibeto-Himalayan Region）
専門分野： 言語学、チベット学（Linguistics, Tibetology）
受入先部局： 文学研究科
（Graduate School of Letters）
前職の機関名： 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
（the Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa（ILCAA）, Tokyo University of Foreign Studies）

人間が言葉によってどのように世界をとらえているのかが知りたくて研究をしています。具体的には、チベット語を対象とし、記述言語学の方法論を用いて音韻・文法の構造を描いてきました。東北チベットで話されるアムド・チベット語については、その言語体系の全体像を一冊の文法書として提示することも試みました。その蓄積のうえで、近年とりくんできたのが、東北チベットの牧畜文化語彙の記述です。冷涼かつ乾燥した高地という環境の中で、チベット・ヒマラヤ地域では牧畜という生業が発達し、伝統的に営まれてきました。そのため、チベット語には、ヤクやヒツジなどの家畜の特徴を表し分ける単語や、乳製品･乳加工に関する単語、家畜の糞のさまざまな形状や種類を表す単語などの、牧畜に関する語彙が発達しています。白眉プロジェクトでは、東北チベットからチベット・ヒマラヤ地域に射程を広げ、言葉を手がかりとして、牧畜の体系、そして、牧畜民たちの世界観に迫っていきたいと考えています。

As a linguist, I use the methodology of descriptive linguistics to study how humans perceive the world through language. Specifically, I have been working on the phonological and grammatical structure of the Tibetan language. For Amdo Tibetan, spoken in Northeast Tibet, I presented the entire linguistic system in a single book describing its grammar. I have recently been working on describing the folk vocabulary of Tibetan pastoralism in Northeast Tibet. The Tibetan language has a well-developed vocabulary related to pastoralism, including words that describe the characteristics of livestock such as yaks and sheep, dairy products, and the various shapes and types of livestock dung. In the Hakubi Project, I would like to expand the scope of my research from Northeast Tibet to the Tibeto-Himalayan region, where pastoralism has been developed and traditionally practiced, to further explore the pastoral system and their worldview through language.

文化的基層としての「牧畜」

チベット高原とヒマラヤ南麓を中心とする「チベット・ヒマラヤ地域」では、高度に応じた垂直的な生業分布がみられます。標高の低い地域では農耕が営まれる一方、標高の高い地域では家畜を飼養し、そこから衣食住の資源を得る「牧畜」という生業を取り入れることで高地での生活が可能となってきました（図１）。特に、牧畜は、北アジア、南アジア、西アジアなど近隣の大文化圏の影響を受けながらも、冷涼かつ乾燥した高地という環境を活かした伝統的な生業形態として

図１：東北チベットでのヤク放牧の様子（著者撮影）

同地域で発達し、仏教などとならび、チベット文化圏の文化的基層のひとつをなしています。

「語彙票」整備と現地調査

しかしながら、これまで、チベット・ヒマラヤ地域の牧畜文化に関しては、現地へのアクセスの難しさや牧畜文化自体の固有性の高さなどにより、調査された地点数とデータの量が多くはありません。そのため、チベット・ヒマラヤ地域の牧畜文化の多様性は、一部の例外を除けば、ほとんど注目されてきませんでした。その問題点を解決すべく、本研究では、既刊の『チベット牧畜文化辞典』をもとに、牧畜文化の語彙項目、体系（乳加工の体系等）、そしてプロセス（屠畜・解体、毛加工のプロセス等）を記録できる「調査票」を作成し、牧畜文化を記録する基盤整備を行います。語彙項目や体系図の他、イラストや写真、動画へのリンクも取り入れた調査票を用いながら、これまで牧畜文化の記録の少ない、東チベット（中国四川省）、ネパール北中部、南チベット（ブータン、インド・アルナチャル、シッキム）、西チベット（インド・ラダック）における現地調査で語彙の聞き取りを行います。

ヤクの個体識別システム

家畜を識別するための表現は、同地域の牧畜文化語彙のうちでも重要なもののひとつです。ここではヤクの個体識別に関する語彙をとりあげてみます。チベット人たちは重要な家畜であるヤクを管理するために、ヤクを呼び分ける様々な表現を発達させてきました。日常的には、毛色と角の有無を組み合わせた表現がよく使用されますが、群れからはぐれた個体を探し出す場合などには、年齢や雌雄の他、毛色、模様の位置、角の有無や形状、体の大きさといった外貌表現（図 2）、時には、群れの中での役割（荷運び用、乳しぼり用、種つけ用など）、ふるまい・性格（おとなしい、くいしんぼう、すぐ逃げる、がんこなど）を組み合わせた詳細な表現をすることもあります。毛色の表現については、東北チベットと南チベット、ネパール北中部で共通していることが近年の調査でわかりましたが、家畜の識別システムがチベット・ヒマラヤでどのくらい共有されているのか、異なる識別システムが存在するのかはいまだ不明です。今後、各地域の家畜の識別表現の研究が進むことで、隣接する牧畜文化圏との影響関係などが明らかになる可能性があります。

図 2：ヤクの外貌表現に関する研究をもとに作成した「ヤクカルタ」（2019 年に作成）

地理言語学の方法論を用いた共時的 / 通時的な分析

牧畜文化は生活の多岐にわたります。そのため、複数地点の地域間比較の際には、家畜から生産される 5 大資源（乳・肉・毛・皮・糞）と「家畜の個体識別体系」に焦点をしぼり、現地調査と文献調査によって得られたデータの語形や体系を分類し、テーマごとに地図化していきます。たとえば、乳加工体系についてはすでに、チベット・ヒマラヤ地域でもいくつかのバリエーションがみられることがわかっています。地図上の共時的分布を分析し、それらがどのように伝播していったのかという通時的側面からの考察を深めていきます。さらに、生態的特徴、近隣の他文化からの影響、エスニシティといった多角的な視点から分析を加え、それらの各テーマの地図を重ね合わせることで、同地域の牧畜文化の多層性を解明していきます。将来的には、本研究を通して、それぞれの文化や言語に特有の民俗文化の記述モデルを提示することを目指しています。

参考文献

[1] 海老原志穂『アムド・チベット語文法』ひつじ書房（2019 年）.

[2] 星泉・海老原志穂・南太加・別所裕介（共編）『チベット牧畜文化辞典（チベット語・日本語）』アジア・アフリカ言語文化研究所（2020 年）.

[3] 海老原志穂「アムド・チベット語におけるヤクの呼び分け—青海省ツェコ県の事例を中心に—」池田巧・岩尾一史（編）『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』京都大学人文科学研究所 , pp. 381-400（2018 年）.